



日本音楽教育学会ニュースレター 第94号

目次

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第54回大会を終えて……………今田 匡彦 2
2. プロジェクト研究にメンバーとして関わって—学会のデータ活用から考えたこと—
……………嶋田 由美 3
3. 院生フォーラムを終えて……………三村 咲・西野 亜唯 3
4. 編集委員会からのお知らせ……………今田 匡彦 4
5. 国際交流委員会より—英語版ホームページ開設—……………菅 裕 4
6. 第26期会長・理事選挙結果報告……………山本 幸正 5

2 会員の声

1. 第54回弘前大会参加記……………清水 稔・長谷川 諒 6
……………山本 敦子・橋澤 慧 7
2. APSMER2023に参加して—in ソウル—……………目戸 郁衣・山辺 未希 8
3. 日本音楽学会第74回全国大会に参加して……………越山沙千子 9
4. 第28回日本学校音楽教育実践学会に参加して……………高木夏奈子 9
5. 第8回学会賞を受賞して……………小畑 千尋 10

3 会員の新聞・近刊等紹介…………… 11

4 報告

1. 2023年度 日本音楽教育学会 総会…………… 12
2. 2023年度 日本音楽教育学会 第3回常任理事会…………… 18
3. 2023年度 日本音楽教育学会 第2回理事会…………… 19
4. 第26期役員選出のための理事会…………… 22

5 事務局より…………… 24

[編集後記]

1 学会からのお知らせ

1. 日本音楽教育学会第54回大会を終えて

大会実行委員長 今田 匡彦

「日本の近代化は、西洋の文化においつくための近代化だったわけだから、それが相変わらず、意識のなかに残っている、あるいは、その中にすみついているのかもしれない。だから、日本人である自分たちが、今、西洋の古い音楽を演奏しているのは一体、自分にとってどんな意味があるかなどについて、一生、ほとんど何も考えずにいられる……明治以来の、日本の近代化というものが、どんなに大変で、つかれるものだったかが良く分かるような気がする。日本の後進性と、そこに押し寄せる西洋文化とによって起こる、ありとあらゆる矛盾は、音楽のなかにも百年の吹きだまりとして残っているのだから、思う。」(三宅 1995, pp. 124-125)

三宅榛名さんによるこの文章が掲載されているエッセイ集『作曲家の生活』(晶文社)が出版されたのが1995年5月で、同じ年の夏、私は初めて三宅さんにお会いしました。今回の基調講演で三宅さんがほんの少しふれられた女声合唱団の打ち上げだったと思います。同じプログラムにR.マリー・シェーファーの作品もあり、武満徹の招きで来日していたシェーファーの通訳を私がしていた、という縁です。ブリティッシュ・コロンビア大学の博士課程の1年目だった私に、三宅さんは「もう少しかかるわね、頑張ってください」とおっしゃったのですが、今回の講演の最後を「だから継続っていうのは、あまり気負わず、気楽に継続っていうのが一番いいんじゃないかっていうふうに思っていますね、頑張ってください」と締めくくられたことと重なり、気楽が一番、と改めて思った次第です。

シェーファーと三宅さんとは、その考え方においてとても共通するものがありました。サントリー・ホールでのコンサートの前日、隣の全日空ホテルの寿司屋で彼は私にこう言ったのです、「カナダカウンスルはオペラ劇場に毎年巨額の助成をしている。なんでカナダがイタリア文化に貢献しなければならないのか理解できない。私に同じ額の助成をしてくれれば、カナダでしかできない作品を創るのに！」と。カナダも、日本も、こと音楽となると、いろいろなものが吹きだまっているようです。それは、自分の居る場所に疑問を持たない演奏家や、エスタブリッシュメントに寄り添う文化事業に象徴されるのかもしれませんが、より深刻な状況にあるのは、演奏家や文化事業の〈下位〉にある(と思わされている)音楽教育なのかもしれません。

1945年以降の現代音楽は、天才、独創、個性等の属性を〈総合〉した19世紀西洋クラシック音楽の脱構築を試みましたが、そこに〈子ども〉という変数はありませんでした。大会実行委員会企画では〈次世代のウェルビーイング〉をキーワードに、小沼純一さん、松永加也子さん、沼田里衣さん、高橋憲人さんが、気負わず、気楽に、百年の吹きだまり対策を施してくれたように思います。そして私を含む5人を支えてくれたのが、三宅榛名さんだったことは言うまでもありません。

第54回弘前大会の参加者は341名でした。Euna Choi先生を始め、遠方よりお越し頂いたみなさまに感謝致します。大会実行委員会の結成は、2022年11月7日でした。大会実行副委員長の清水稔先生、杉田政夫先生、事務局長の小田直弥先生、実行委員の金崎惣一先生、木下和彦先生、小杉亜衣先生、高橋憲人先生、武内裕明先生、千葉修平先生、橋本智明先生、前田一明先生、松本哲平先生は、他にも山のような仕事を抱えているにもかかわらず、極めて **efficient** (すいません、日本語より正確な表現なので) に、大会運営に取り組んで下さいました。改めて感謝致します。

2. プロジェクト研究にメンバーとして関わって—学会のデータ活用から考えたこと—

嶋田 由美 (学習院大学)

本年度のプロジェクト研究は「生活史の中の音楽と音楽教育」という壮大なテーマの2年目にあたる、学齢期の子供を対象に行った質問紙調査による研究であった。詳細は『音楽教育学』第52巻第2号に掲載される報告に譲るが、プロジェクトの大きな成果として、本学会が予備的調査として1987年に行った東京都内小中学生への質問紙調査結果が学会に保管されており、それとの比較考察ができた点あげられる。35年間という時間的隔たりからは子供を取り巻く社会的、音楽的環境、特にメディアの変容による子供の音楽聴取の在り方が様変わりしていることに驚かされたが、同時に1987年時の調査にも関与し、この間一貫して音楽教員養成に携わってきた筆者自身、このような変化に対応した教員養成を行ってこられたのか自問自答するプロジェクトでもあった。

とりわけ、かつては「好きな曲」の回答が学校で習った曲、あるいは歌謡曲やアニメソングなど、ある程度、想定される枠組み内で集中化の傾向が見られたのに対し、今年度の調査ではまさに百人百様で、その多くがネット配信によるものであったことには愕然とした。これでは学校で音楽教育をする意味が見出しにくいという思いさえよぎった。しかしながら学校での、共に歌い、演奏し、鑑賞する活動は、その年齢でその場に集ったものにしかできない経験である。変わっていくものに目を配りつつ共に音楽することの喜びを、どれだけ深く子供の心に刻ませ、生涯にわたる豊かな音楽生活の礎を作ってあげられるのか、音楽教育はまさに正念場に差し掛かっていると痛感したのである。

3. 院生フォーラムを終えて

三村 咲 (弘前大学院生)・西野 亜唯 (弘前大学院生)

今大会の院生フォーラムでは、大会全体のテーマである「音楽教育とウェルビーイング：次世代に芸術が果たす役割を考える」を踏まえ、「共生社会の音楽教育実践を考える」というテーマで討議しました。コロナ明け初の対面による院生フォーラムだったため、対面だからこそ小さなことまで共有できると考え、参加者が個人的に今まで感じていた思いを拾える場にすることを目標としました。それぞれの研究のなかで構想している実践、既に実施してみた実践、実施する上で迷っていることなどを紹介し合い、それに伴う不安や悩みなどを院生同士で共有しました。また、まだオフィシャルな場で発表できる段階にない実践研究に関する意見交換や、既存の音楽教育実践に対する問題提起も行える機会にすることを視野に入れつつ、準備しました。

学部生2人、修士課程6人、博士課程2人に加え、実行委員の先生方も参加者としてディスカッションを行いました。最初に全員で自己紹介を行い、その後2～3人のグループになり自分の研究実践で感じている不安などについて話し合い、グループ内で一人一人の考えにフォーカスを当てながら、各グループで話し合った内容を全体へ共有しディスカッションしました。最終的な話し合いの方向性として、実践に対する不安について各分野の方法論にとどまらず多角的に考えました。その結果、音楽教育を研究する院生ならではの課題の再確認や、課題解決の糸口を見つける場となりました。

拙い進行のなか御協力いただいた参加者の皆様、並びに沢山のご助言をくださった先生方に心から感謝いたします。

4. 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 今田 匡彦

みなさまご存じのように、2020年12月1日から『音楽教育学』と『音楽教育実践ジャーナル』への投稿が、〈オンライン投稿〉のみとなりました。それに伴い〈投稿規定〉及び〈執筆の手引き〉に一部改訂がありました。『音楽教育学』投稿規定Ⅲ「執筆要領6.」では、「拙稿」「拙著」といった表記のみならず、研究助成、共同研究者への謝辞など、投稿者名や所属機関が判明できるような記述をしないことが明記されています。同様の内容が『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定ではⅡ「執筆要領7.」に記載されています。また〈執筆の手引き〉（『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』共に）では、「10 人物表記」に「また、研究助成、共同研究者への謝辞など、投稿者名や所属機関が判明、推測できるような記述もしない（これらの情報は、採択後に加筆することができる。）」が追記されました。チェックシートについても併せてご参照下さい。

2024年刊行予定の『音楽教育実践ジャーナル』vol.22の特集テーマは「これからの教員養成を考える」です。小学校を中心とした教員就職率の向上、教職大学院での教職の高度化、STEAM教育、インクルーシヴ教育、データ・サイエンス、ヘルス・リテラシー、国際理解教育、人口減に比例する教職需要減少への対応、生成AI時代に求められる資質・能力、教科教育・教科専門、総合大学・単科大学、小学校教員養成、教職大学院等、さまざまなキーワードが考えられます。奮ってご投稿ください。

投稿締切は2024年2月15日（木）です。

5. 国際交流委員会より—英語版ホームページ開設—

国際交流委員長 菅 裕

10月14～15日に弘前大学で開催された日本音楽教育学会第54回大会（弘前大会）では、韓国音楽教育学会（KMES）チェ・ユナ会長によるご講演に加え、KMES チェ・ジンギョン会員による研究発表がありました。日本音楽教育学会と韓国音楽教育学会は、これまでも継続的に相互交流を重ねてきました。特に今年の2月18日には、日韓音楽教育実践交流会をオンラインで実施し、韓国からも4人の方より貴重な情報提供をいただきました。このような交流の機会を通じて、日本と韓国の音楽教育の現状や課題についての相互理解を促進しているところです。

また弘前大会では、カリブ海の国バルバドスから参加されたデービッド・アコンボ会員による発表もありました。アコンボ会員は、今年5月に本学会に特別会員として入会されました。

このように本学会が海外に対して開かれていくことは大変喜ばしいことです。しかしながら、学会からの海外への情報発信や海外在住の研究者の入会手続きの円滑化にはまだ多くの課題が残っています。そこで国際交流委員会では、本学会ホームページ英語版を作成、既に運用を開始しています。このホームページをきっかけとして、国際交流の輪がさらに広がっていくことを期待しています。

英語版 Web サイトはこちらからご覧いただけます。

<https://en.jmes.me/>



6. 第26期会長・理事選挙結果報告

選挙管理委員長 山本 幸正

「第26期日本音楽教育学会会長・理事選挙」は、会則、細則、選挙管理委員会規定、会長・理事選挙実施要領に則り、7月10日～7月28日の日程で実施され、7月29日に開票されました。会員の皆様には、ご協力いただきありがとうございました。第26期会長選挙の結果を下記のとおりご報告いたします。

記

有権者数：1,420

当選者（得票数）	次点者（得票数）	投票総数（票）	投票率
権藤 敦子 (57)	今田 匡彦 (26)	347	24.4%

投票総数：347票（内 紙媒体投票 4, 白票 0 / 無効 0）

日本音楽教育学会選挙管理委員会
 委員長 山本 幸正
 副委員長 市川 恵
 委員 木下 和彦
 ” 三橋さゆり
 ” 山内 雅子

第26期理事選挙の結果を下記のとおりご報告いたします。

記

有権者数：1,420

地区	当選者		次点者	投票総数 /有権者数	投票率 (%)
北海道	寺田 貴雄		尾藤 弥生	17/48	35.4
東北	今田 匡彦		杉田 政夫	39/81	48.1
関東	水戸 博道	有本 真紀	駒 久美子	119/629	18.9
	今川 恭子	阪井 恵			
	本多佐保美	山下 薫子			
	中地 雅之	西島 央			
	中嶋 俊夫				
北陸	伊野 義博		玉村 恭	21/67	31.3
東海	長谷川 慎	松永 洋介	高橋 範行	41/137	29.9
近畿	菅 道子	檉下 達也	神原 雅之	46/195	23.6
	高見 仁志				
中国四国	三村 真弓	小川 容子	伊藤 真	45/165	27.3
九州	菅 裕		日吉 武	19/98	19.4

投票総数：347票（内 紙媒体投票 4, 白票 0 / 無効 0）、全体の投票率 24.4%

日本音楽教育学会選挙管理委員会
 委員長 山本 幸正
 副委員長 市川 恵
 委員 木下 和彦
 ” 三橋さゆり
 ” 山内 雅子

2 会員の声

1. 第54回弘前大会参加記

清水 稔 (弘前大学)

4年ぶりの対面での実施、「音楽教育とウェルビーイング」について問われた大会は、発表される方々の真剣な表情、参加される方々の熱気に包まれた大会であった。人は失うことで気付かされることがあるが、こうして対面での感覚を味わうと、画面越しには「ここ」が無かったことに気付かされる。目が捉える景色と耳が捉える音に対して人間は正直だ。発表している人だけではなく、それを見つめる司会者や聴衆のまなざしが見え、表情がそれとなく入ってくる。また、移動の最中に、学生スタッフの働く姿にふと目がいたり、「お久しぶりです」と声をかけられて先の発表や日常の研究の話が始まったりする。そのように、現出するモノゴトが次に起こることの可能性を伴って地平を広げている時、そんな（切り捨てられなかった）余白にあることが、やはり人々の営みに価値あることなのだと思われた。そして、そのように敢えて言葉にしなくても、弘前を後にするときこそう感じてもらえたのであれば、運営で自分がミスしたことも、少しこの対面という場に助けられて救われる気がした。そのような許容を促す人々の何かを生み出そうとする試行錯誤の実感、私にシンポジウムの内容を思い起させたが、それらの貴重な話も、この場でしか得られない聞き方（ここでしか生じない意味作用）があるのだろうと思う。

さて、ここからは謝辞。そのような「いま」の「ここ」を生み出した、招待講演、シンポジウムの方々をはじめ、研究発表者の皆さんが、ここ弘前に来ていただいたことに何よりも感謝いたします。そして、今回、実行委員として関わらせていただき、これからは、一礼してから入場しようと思うほどに、大会が本当に多くの方々のご労苦に支えられていることを知りました。そのように単に発表だけではないことも含めて、対面と Well-being は決して離れてはいないのだろうと思える大会でした。

長谷川 諒 (神戸大学)

今大会への参加を通して、私は自分が「音楽教育について専門家たちと議論する」ことに随分と飢えていたのだと自覚しました。今大会では初日の研究発表に加え、2日目の共同企画『自律的に音楽する教員』を育む養成課程試論』にパネリストとして登壇したのですが、準備段階の打ち合わせから当日の発表、そしてフロアの方々との質疑応答に至るまで、音楽教育学という学問領域に深くコミットする方々と真剣に議論できることがこんなにも楽しいものかと新たに感じ入ることになりました。また、今回の共同企画は教員養成をテーマにしたものだったのですが、発表後には私と同じように教員養成課程で働く会員の皆様にお声掛けいただき、発表者一同大変励まされました。音楽教育学のような学問を専門とする大学教員は多くの場合、各大学で孤独に研究や教員養成教育に従事する機会が多いのではないかと推察しますが、本大会は同志と出会い語らう場としても機能していたように感じました。パンデミック下でのオンライン大会にもいくつか参加してきましたが、対面での大会で生じるディスカッションには確かな体温が感じられ、それに触発されて様々なアイデアが生まれてきたように思います。大学の講義を休講にして大会に参加するのはなかなか憚られたのですが、それでも参加してよかったと思える大会でした。本大会を運営して下さった実行委員会の皆様に感謝申し上げます。

山本 敦子 (高田短期大学)

2019年度以来、久しぶりの対面での開催となった今大会は青森県の弘前大学にて行われました。弘前市はりんごの生産量が日本一だそうで、電車の車窓からはのどかな山並みを背景に赤く色づいたりんごの木々があちこちに見え、旅路の心も思わず弾みます。そのような中、私は1日目の研究発表Eにおいて「保育者は音楽的な実践力量をどのように形成していくのか(1)―音楽の得意な保育者へのインタビュー調査をもとに―」というテーマで口頭発表をさせていただきました。この研究の着想は、私が長年にわたり定期的に観察を行っている私立A保育園で、生き生きと音楽的な保育実践を行う先生方との出会いにあります。先生方はいったいどのような経緯を経て、今に至るのだろうか。そのプロセスと要因を質的に明らかにすることで、保育者の音楽的な資質・能力および専門性の教育や研究に何ら還元できるのではないかと考え、数年前よりインタビューを開始しました。保育者として就職してから現在までの道のりについての語りには、保育者(園)それぞれの個別的なストーリーと背景があり、その一つ一つに研究を通じて立ち会わせていただくことは大変ありがたく、先生方との新たな絆が紡がれるなど様々な実りを私にもたらしてくれています。保育者の成長プロセスを音楽との関わりから読み解いていくという試みは、これまであまり前例がないため未だ模索中ではありますが、当学会で昨年度より始められたプロジェクト研究「生活史の中の音楽と音楽教育 Music in Life History and Music Education」での提言や関連の先行研究にも学びつつ、発表後の質疑でいただいた示唆をもとに今後も継続して進めてまいりたいと、気持ちを新たに帰路につきました。

橋澤 慧 (神戸大学院生)

今大会では、「音大生のメンタルヘルスに関する調査」というテーマで発表させていただきました。コロナ禍で大学院生になった私にとって、これまで参加した学会の多くは「自宅や研究室でPCを眺めるもの」でした。今大会は完全対面開催ということで、多くの先生方とお話をする機会に恵まれ、研究に対するヒントだけでなく、この参加記を執筆するというご縁までいただくことができました。対面ならではとも言える、人と人とのつながりやコミュニティの広がりといった、「生」の良さを改めて実感したと同時に、親指1本で誰かとつながる手軽さに慣れた今、敢えて「生」にこだわり完全対面での開催を決断された大会関係者の皆様の気概を感じた2日間でもありました。

また、大会期間中は、学生から経験豊富な先生方まで多くの音楽教育に熱意のある方々が一堂に会し、時には教室で、時には地元産のシードルを片手に、様々な角度から音楽教育についての熱い議論と名刺が交わされている光景が印象的でした。音楽業界や教育業界といった「生」が大切な分野の多くが新型コロナウイルスの流行で甚大な被害を受けたにも関わらず、より良い音楽や教育の在り方を淡々と模索してこられた先生方の存在を肌で感じ、未来を担う大学院生としては身の引き締まる思いです。未来が明るいものになるよう、今後とも精進して参ります。

最後になりましたが、今大会が初参加であったにも関わらず口頭発表の機会をいただきましたことに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。また、当日はフロアの先生方に温かく見守っていただいたおかげで、拙いながらもなんとか無事に発表を終えることができました。本当にありがとうございました。

2. APSMER2023 に参加して—in ソウル—

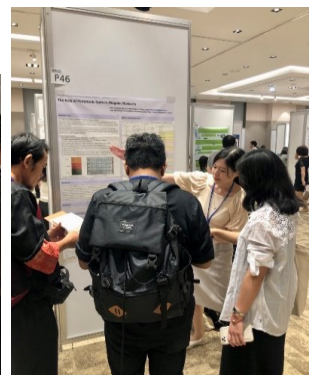
目戸 郁衣 (帝京大学)・山辺 未希 (仙台青葉学院短期大学)

8月9日から11日の3日間、韓国ソウルにて APSMER2023 が開催されました。2年に1度の APSMER は、前回はオンライン開催であったため、4年振りに対面での開催となりました。私たちにとっても海外での学会発表は4年振りとなり、英語での発表準備や、久しぶりの海外渡航への緊張を経て当日を迎えました。準備期間は長く感じましたが、学会はあっという間の3日間でした。

学会では、人と直接会うことの大切さを何よりも実感しました。対面開催が叶わない期間があったからこそ、様々な国の先生方と音を含めた同じ空間と時間を共有できたことに、より一層充実感を得ることができました。また、人と直接会う中でご縁の大切さを強く実感しました。私たち2人は、コロナ禍の Zoom を通して知り合い、この度の宿泊先で偶然出逢い、滞在期間の多くを共にしました。同世代であること、保育者養成課程の教員であることなどの共通点から、学会後も教育や研究について語り合うことのできる仲間となりました。さらに、現地でご一緒させていただいた先生方とのご縁で、ソウル大学の先生、院生の方々と交流する機会もいただきました。研究テーマについてお聞きすると、「メタバースによるオペラの創作」など日本では珍しいものも多く、韓国の音楽教育の研究動向に触れられた貴重な機会となりました。これらのご縁は国際学会の醍醐味だと思います。人とのご縁により、研究も教育もまた一段と面白くなるのだと深く感じました。

人とのご縁もさることながら、コロナ禍を経た研究動向の変容、私たち自身の変容も実感しました。前回私たちが発表した4年前と比較すると、ICT に関する研究が増えたように思います。教育の中でいかに ICT を活用できるかという視点での発表が増え、コロナ禍がもたらした教育の発展を肌で感じました。自分自身も発表の際に ICT (翻訳アプリなど) を活用し、前回よりも多くの方とコミュニケーションを取ることができました。自分のやりたいことに対して、いかに ICT を活用するのかという姿勢はこの4年間で強まったと考えます。また、前回の私たちは学生として参加していましたが、今回は保育者養成課程の教員として参加しました。身を置く環境が変わったことで、研究の関心の幅がさらに広がり、多くの発表者とお話することができました。拙い英語ながら、通じた際の喜びを重ねたことも、本学会で感じられた充実感の1つです。

学会を通して、直接お会いすることやご縁の大切さ、私たち自身の変容を感じられたことで、今後より一層研究・教育に精進したいと考えました。村尾先生のご講演の「学ぶことは教えること以上に楽しい」というお言葉を胸に、学び続けることに邁進いたします。



3. 日本音楽学会第74回全国大会に参加して

越山 沙千子 (実践女子大学)

11月4日(土)～5日(日)、聖徳大学にて日本音楽学会第74回全国大会が開催されました。対面・オンラインのどちらでも参加可能なハイブリッド形式で実施され、4本のパネル企画、54本の研究発表が行われました。私も高等女学校の音楽教科書の歌唱教材について、欧米の教科書及び歌集との関連を中心に発表し、多くの貴重なご意見、ご助言をいただくことができました。また、大会では明治期から昭和期の日本の音楽文化をテーマにした研究発表を中心に拝聴し、歴史研究において緻密な調査と資料の丁寧な読み込みから考察を行うことの大切さを改めて学ぶことができました。

第2日のパネル企画「音楽著作権が現在孕む問題と将来への展望」は、今回是非とも学びたかったテーマの一つでした。登壇者である弁護士の水口瑛介氏はアーティファクト法律事務所の代表で、Law and Theory を設立し、音楽家の法律相談に無料で応じています。水口氏は、著作権法の基本的な考え方から日本の音楽ビジネスの仕組みまでを分かりやすく説明した上で、具体的な事例を示しながら今日の音楽著作権が孕んでいる問題を指摘しました。特に、生成AIに関しては、生成AIを用いた制作物の権利だけでなく、楽曲をAI学習に使用されることを拒否できる権利について対応することが喫緊の課題であると感じました。誰もが作り手になり得、知らないうちに著作権侵害をする可能性がある現在、多くの人に自分事として考えてもらうために、音楽教育に携わる者として何ができるのかを考える貴重な機会となりました。

4. 第28回日本学校音楽教育実践学会に参加して

高木 夏奈子 (植草学園大学)

2023年8月19日・20日に、国立オリンピック記念青少年総合センターを会場に日本学校音楽教育実践学会第28回全国大会が開催された。大会の構成は《セミナー》《課題研究》《自由研究》《参加型教材実験プロジェクト》である。《自由研究》では47件の発表、《課題研究》では5年間継続して取り組むテーマ『生成の原理』に基づく音楽科授業における教科内容の体系の2年目として「教科内容の観点からみた教材研究の視点」について議論が行われ、新企画の《参加型教材実験プロジェクト》では近畿・中国の2支部の取り組みが発表された。

筆者は、大会の幕開けとなるセミナーに参加した。長谷川眞理子氏による講演「領域横断的な視点が切り拓く音楽教育の新たな世界 その1—ヒトの進化と音楽、リズム、動き、言語—」である。長谷川氏は冒頭で、人類学というと一般には文化人類学が想起されるが、長谷川氏の研究はヒトという動物がどのように進化してきたのかを探る自然人類学であること、自然人類学は本来一つの専門分野ではなく、多方面の領域横断的な学問であることを語られた。常日頃、音楽という切り口から人間について考えることが習慣となっている筆者にとって、動物としてのヒトについての圧倒的な情報量に基づいた講演は極めて刺激的だった。ヒトだけが言語を持ち、心の存在を共有し共感すること、言語とリズムの関係など、他の動物とヒトとの違いこそが人間が音楽を楽しめる決定的な差異であることを認識し、領域を超えて新しい視点を獲得する貴重な機会となった。

5. 第8回学会賞を受賞して

小畑 千尋 (文教大学)

この度は、第8回日本音楽教育学会学会賞という栄誉ある賞を賜り、心から感謝申し上げます。今回の受賞は、私個人の力で得たものではなく、多くの皆様からご協力をいただいたおかげだと感じております。

受賞対象の論文「重度の聴覚障害学生の歌唱活動における内的フィードバック能力の獲得過程」は、重度の感音性難聴の大学生Sさんを対象に実践した歌唱活動のセッションについて分析した研究です。Sさんは、私の担当する授業の受講生で、私にとって初めて関わる聴覚障害生でした。Sさんとの歌のセッションが始まったきっかけは、授業のフォローとして個別の時間を設ける必要性を感じたことでしたので、当初は授業期間と同じく半年でセッションも終了する予定でした。しかし、互いに続けていきたいという気持ちが強くなり、約3年半、計72回実施しました。その間、本当に多くの方がサポートしてくださいました。

本論でも触れさせていただきましたが、Sさんの友人Jさん(聴覚障害生)と3名で同一音高を発声することを試みたり、Sさんが同一音高で歌う感覚を「きれい」と表現したり、声が響き合う感覚を共に楽しんだ時間は、その場にいる我々だけが感じることでできる大切な時間でした。

本論では、第1回から20回までのセッションを分析対象としましたが、その後も歌のセッションは続き、また、さまざまな出来事もありました。Sさんが試行錯誤しながら通常学級での教育実習を経験したり、教員採用試験の実技試験でピアノの弾き歌いの演奏を行ったりもしました。Sさんは聴覚に障害があるため、この実技試験を配慮事項として免除してもらうことも可能だったと思います。しかし、本人が演奏することを強く希望したため、それを応援したく、Sさんのお母様にも協力していただきながら一緒に練習しました。そして、Sさんから教員採用試験合格の知らせを受け取ったのは、偶然にも数年前の日本音楽教育学会全国大会の休憩時でした。

Sさんとのセッションを、私だけの経験としてとどめてはいけないという思いから論文としてまとめたかったのですが、どの部分を分析対象にしたらよいか絞りがきれず、執筆にとりかかるまでに数年かかってしまいました。

論文の完成までに、本当に多くの皆様にご指導いただきました。ご指導いただきましたすべての先生方、査読をしてくださった先生方、審査で選出してくださった先生方に深く感謝申し上げます。そしてなにより感謝したいのは、Sさんです。聴覚障害者に対する知識がゼロであった私にとって、Sさんとのセッションは毎回新たな気づきの連続で、同時に歌うことの喜びを共有できる時間でした。

まだまだ至らない点が多いと存じますが、学会賞を頂いたことを励みに、今後も精進して参りたいと思います。

本当にありがとうございました。

3 会員の新刊・近刊等紹介

★多田 純一著『澤田柳吉 日本初のショパン弾き』春秋社 2023/8/10 A5判・416頁 ISBN:978-4-393-93608-5 [本体4,500円+税]

本書は、明治から大正、昭和時代にかけて、ピアニストという職業のパイオニア的存在として多彩な音楽活動を展開した最初の日本人「ショパン弾き」澤田柳吉の人物伝である。

★岩井 智宏著『トモちゃんの子どもと音楽から学んだ授業づくり』音楽之友社 2023/8/26 A5判・91頁 ISBN:978-4-276-32102-1 [本体1,800円+税]

音楽教師から担任の先生まで幅広い教育者向け。学校とはどんな場所だろう？音楽とはどんな教科だろう？上手になることが大切なのか？などこれまでの「こうあるべき」を見つめ直すきっかけとなることを願って書いた一冊。実践も幅広く紹介。

★塚原 康子著/徳丸 吉彦監修『ビジュアル 日本の音楽の歴史 第3巻』ゆまに書房 2023/8/31 B5判・91頁 ISBN:978-4-8433-6358-4 [本体2,800円+税]

明治期以降の日本の音楽の歴史を、近代(1868～1945)と現代(1945～)に区分して豊富な図版とともに叙述、併存する伝統音楽と西洋音楽が影響を与え合い変化しながら今日に至るまでを概観した書。

★瀧川 淳編著『音楽×アプリ×授業アイデア100』明治図書 2023/9/1 B5判・112頁 ISBN:978-4-18-356729-1 [2,486円(税込)]

本書には、1人1台端末の時代にICTを音楽授業で活用するためのアイデアを100本収録。また音楽授業におけるICTとの関わり方を明説することで、本書のアイデアを起点に、音楽とのより多様な出会いが生まれることを目指している。

★多田 純一監修『澤田柳吉の芸術 ピアノロール & SPレコード 日本録音集』(CD 2枚組) サクラフォン 2023/9/13 [4,750円(税込)]

明治から昭和初期にかけて活躍した最初の日本人「ショパン弾き」澤田柳吉が作成した日本製のピアノロールの新録音、澤田が録音したSPレコード(未発売のテストプレス盤を含む)の復刻を含む集大成。

ニュースレターでは「会員の新刊・近刊等紹介」「会員の声」への皆様のご投稿をお待ちしております。書籍、CD、DVDなどのリリースの情報がありましたら、基本的な書籍情報、音源情報に加えて「である調」90字程度の紹介文をお送りください。

投稿先アドレス☞(半角)onkyoiku@remus.dti.ne.jp



4 報告

1. 2023 年度 日本音楽教育学会 総会

日 時：2023 年 10 月 14 日（土）16：40～17：40

会 場：弘前大学文京町キャンパス（弘前大学創立 50 周年記念会館みちのくホール）

齊藤事務局長より、委任状 302 通、出席者 107 名、計 409 名であり、会則第 13 条に基づき、正会員総数（1,560 名）の 5 分の 1 の定足数（312 名）を満たし、総会が成立することが確認された。

1. 開会の辞（有本）

2. 会長挨拶（権藤）

これまで充実した学会活動が企画できていること、選挙の電子化、資料のアーカイブ化など、会員の皆様のお蔭で学会活動が着実に前進していることが報告された。

3. 議長選出 杉田政夫会員（福島大学）が選出された。

4. 審議事項

(1) 2022 年会計報告（寺田）・監査報告（伊藤）

2022 年度会計報告・監査報告について説明され、承認された。

2022 年度会計報告

I 一般会計

収 入			支 出		
科 目	予 算	決 算	科 目	予 算	決 算
前年度繰越金	9,988,524	9,988,524	大会運営費	2,280,000	1,975,561
正会員会費※1	11,074,000	10,766,000	大会実行委員会経費	700,000	700,000
<small>（次年度会費）</small>			事務経費	1,380,000	1,177,866
学生会員会費	20,000	16,000	フロンティア研究	200,000	97,693
団体会員会費	30,000	30,000	学会誌費	2,500,000	2,355,850
賛助会員会費	250,000	250,000	音楽教育学会費	1,650,000	1,489,680
学会誌売上金	300,000	279,748	楽譜ジャーナル発行費	850,000	866,170
本誌代		231,600	ニュースレター費	250,000	172,480
送料収入		48,148	例会運営費	640,000	600,340
大会参加費	1,400,000	1,621,000	通信・郵送費	1,250,000	822,011
その他	20,000	549,905	会議費	20,000	1,729
大会実行委員会返金		186,742	旅費・交通費	1,000,000	81,888
例会運営費返金		363,152	HP管理費	348,000	355,920
雑収入		11	事務局費	4,805,000	3,880,686
			事務費	450,000	168,983
			運営費	1,600,000	1,425,844
			人件費	2,700,000	2,236,659
			事務局員保険費	55,000	49,200
			分担金	280,000	280,000
			RILM支援金	50,000	50,000
			選挙積立金	550,000	550,000
			ゼミナール/ワークショップ基金	300,000	300,000
			国際交流基金	300,000	300,000
			研究出版基金	700,000	700,000
			学会基金	3,000,000	3,000,000
			予備費	4,809,524	0
			小 計	23,082,524	15,428,485
			次年度繰越金		8,074,712
計	23,082,524	23,501,177	計	23,082,524	23,501,177

※1 特別会員2名含む

※2 11月4日理事会承認時の正会員数。自然退会者抜き。

【その他会計報告】※2022年度その他会計

Ⅱ 研究出版基金 **現在高** **¥4,138,792 (①-②)**

収入	2021年度までの積立金 2022年度積立金 利息	¥3,438,761 ¥700,000 ¥31	¥4,138,792 ①
支出		¥0	¥0 ②

Ⅲ 学会基金 **現在高** **¥5,152,469 (①-②)**

収入	2021年度までの積立金 2022年度積立金 利息	¥2,263,437 ¥3,000,000 ¥24	¥5,263,461 ①
支出	HPシステム構築・改良費用 資料の保存・アーカイブ化 調査費 学会賞 残高証明発行手数料	¥0 ¥110,112 0 ¥880	¥110,992 ②

Ⅳ ゼミナール・ワークショップ基金 **現在高** **¥1,544,513 (①-②)**

収入	2021年度までの積立金 2022年度積立金 利息 ゼミナール返金	¥1,374,951 ¥300,000 ¥12 ¥19,550	¥1,694,513 ①
支出	ゼミナール補助金	¥150,000	¥150,000 ②

Ⅴ 国際交流基金 **現在高** **¥3,748,153 (①-②)**

収入	2021年度までの積立金 2022年度積立金 利息 日韓音楽教育実践交流会返金	¥3,781,139 ¥300,000 ¥32 ¥25,453	¥4,106,624 ①
支出	韓国音楽教育学会との交流事業 国際交流促進事業費	¥100,600 ¥257,871	¥358,471 ②

Ⅵ 選挙積立金 **現在高** **¥725,595 (①-②)**

収入	2021年度までの積立金 2022年度積立金 利息	¥175,594 ¥550,000 ¥1	¥725,595 ①
支出			¥0

◎ 2022年度決算を上記の通り報告いたします。

2023年 4月21日 会計担当 寺田 貴雄
国府 華子

◎ 上記の通り相違ないことを監査いたしました。

2023年 4月21日 会計監事 島崎 篤子
伊藤 誠

(2) 2023年度事業計画 (齊藤)

2023年度の事業計画(案)について説明され、承認された。

2023年度事業計画(案)

2023年	
4月21日	2022年度会計監査会(Web会議)
4月22日	2023年度第1回常任理事・理事会(Web会議)
5月18日	ニューズレター第92号発行(オンライン)
5月21日	2023年度第1回編集委員会(対面会議)
5月31日	第54回大会研究発表・共同企画申込・要旨締切
6月23日	第54回大会研究発表受理通知
7月9日	2023年度第2回常任理事会(Web会議)
7月10日～28日	第26期会長・理事選挙(電子投票&郵送投票)
8月18日	ニューズレター第93号発行
8月20日	2023年度第2回編集委員会(対面&Web会議)
8月31日	『音楽教育学』第53巻第1号発行
8月31日	第54回大会プログラム発送
9月22日	第54回大会参加申込締め切り
9月26日	第54回大会参加費振込締め切り
10月13日	2023年度第3回常任理事会, 第2回理事会(Web会議)
10月14日, 15日	第54回大会・総会(弘前大学/対面実施)
10月22日	2023年度第3回編集委員会(対面会議)
12月2日	第11回ワークショップ
12月下旬	ニューズレター第94号発行(オンライン)
12月下旬	『音楽教育実践ジャーナル』vol. 21発行
12月下旬	会員名簿発行
2024年	
2月中旬	2023年度第4回常任理事会
2月中旬	2023年度第4回編集委員会
3月下旬	ニューズレター第95号発行
3月下旬	『音楽教育学』第53巻第2号発行
3月末日	2023年度会計決算

(3) 2023年度補正予算(寺田)

2023年度補正予算(案)について説明され、承認された。

2023年度補正予算(案)

I 一般会計		支出	
科目	収入	科目	支出
前年度繰越見込金	8,074,712	大会運営費	2,730,000
正会員会費※1	10,850,000	大会実行委員会経費	700,000
	7,000×正会員実数1,550※2	事務局経費	1,830,000
学生会員会費	12,000	フロンティア研究	200,000
団体会員会費	30,000	学会誌費	2,550,000
賛助会員会費	250,000	音楽教育学発行費	1,650,000
学会誌売上金	300,000	実践ジャーナル発行費	900,000
本誌代		ニュースレター費	250,000
送料収入		例会運営費	640,000
大会参加費	1,400,000	通信・郵送料	1,250,000
その他	20,000	会議費	20,000
大会実行委員会返金		旅費・交通費	1,000,000
例会運営費返金		HP管理費	400,000
雑収入		事務局費	4,805,000
		事務費	450,000
		人件費	2,700,000
		事務局運営費	1,600,000
		事務局員保険費	55,000
		分担金	280,000
		RILM支援金	50,000
		選挙積立金	300,000
		ゼミナル/ワークショップ基金	200,000
		国際交流基金	200,000
		研究出版基金	200,000
		学会基金	900,000
		予備費	5,161,712
計	20,936,712	計	20,936,712

II 研究出版基金	
収入	¥4,338,792 ①-②
2022年度までの積立金	¥4,138,792
2023年度積立金	¥200,000
支出	¥0 ②

III 学会基金	
収入	¥4,652,469 ①-②
2022年度までの積立金	¥5,152,469
2023年度積立金	¥900,000
支出	¥6,052,469 ①
HPシステム構築・改良費用	¥100,000
名簿作成費	¥750,000
資料の保存・アーカイブ化 調査費	¥500,000
学会賞	¥50,000
	¥1,400,000 ②

IV ゼミナル・ワークショップ基金	
収入	¥1,544,513 ①-②
2022年度までの積立金	¥1,544,513
2023年度積立金	¥200,000
支出	¥1,744,513 ①
ゼミナル・ワークショップ補助金	¥200,000
	¥200,000 ②

V 国際交流基金	
収入	¥3,748,153 ①-②
2022年度までの積立金	¥3,748,153
2023年度積立金	¥200,000
支出	¥3,948,153 ①
韓国音楽教育学会との交流事業	¥100,000
国際交流促進事業費	¥100,000
	¥200,000 ②

VI 選挙積立金	
収入	¥165,595 ①-②
2022年度までの積立金	¥725,595
2023年度積立金	¥300,000
支出	¥1,025,595 ①
第26期選挙	¥860,000
	¥860,000 ②

※1 特別会員4名を含む。

※2 正会員実数は7月9日現在。自然退会者抜き。

(4) 2024 年度事業計画 (齊藤)

2024 年度事業計画 (案) について説明され、承認された。

2024 年度事業計画 (案)

2024年	
4月中旬	2023年度会計監査会
4月下旬	2024年度第1回常任理事・理事会
4月下旬	2024年度第1回編集委員会
5月中旬	ニュースレター第96号発行 (オンライン)
6月中旬	第55回大会研究発表・共同企画申込・要旨締切
7月上旬	第55回大会研究発表受理通知
7月中旬	2024年度第2回常任理事会
8月上旬	2024年度第2回編集委員会
8月中旬	ニュースレター 第97号発行
8月	第18回音楽教育ゼミナール
8月下旬	『音楽教育学』第54巻第1号発行
8月下旬	第55回大会プログラム発送
9月下旬	第55回大会参加申込・参加費振込締め切り
10月中旬	2024年度第3回編集委員会
10~11月	2024年度第3回常任理事会・第2回理事会
10~11月	第55回大会・総会 (玉川大学)
12月下旬	ニュースレター第98号発行 (オンライン)
12月下旬	『音楽教育実践ジャーナル』vol. 22発行
2025年	
2月中旬	2024年度第4回編集委員会
2月中旬	2024年度第4回常任理事会
3月下旬	ニュースレター第99号発行
3月下旬	『音楽教育学』第54巻第2号発行
3月末日	2024年度会計決算

(5) 2024 年度予算計画 (寺田)

2024 年度予算計画 (案) について説明され、承認された。

2024 年度予算 (案)

I 一般会計

収入		支出	
科目		科目	
前年度繰越見込金	5,161,712	大会運営費	2,730,000
正会員会費※1	10,850,000	大会実行委員会経費	700,000
		事務局経費	1,830,000
		事務局外研究	200,000
学生会員会費	12,000	学会誌費	2,550,000
団体会員会費	30,000	音楽教育学発行費	1,650,000
賛助会員会費	250,000	実践ジャーナル発行費	900,000
学会誌売上金	300,000	ニュースレター費	250,000
		例会運営費	640,000
本誌代		通信・郵送費	1,250,000
送料収入		会議費	20,000
大会参加費	1,400,000	旅費・交通費	1,000,000
その他	20,000	HP管理費	400,000
大会実行委員会返金		事務局費	4,805,000
例会運営費返金		事務費	450,000
雑収入		人件費	2,700,000
		事務局運営費	1,600,000
		事務局員保険費	55,000
		分担金	280,000
		RILM支援金	50,000
		選挙積立金	600,000
		ゼミナール/ワークショップ基金	200,000
		国際交流基金	200,000
		研究出版基金	200,000
		学会基金	500,000
		予備費	2,348,712
計	18,023,712	計	18,023,712

※1 特別会員4名を含む。

※2 正会員実数は7月9日現在。自然退会者抜き。

<2024年度その他会計案>

II 研究出版基金	¥4,538,792	①-②
収入		
2023年度までの積立金	¥4,338,792	
2024年度積立金	¥200,000	¥4,538,792 ①
支出		
		¥0 ②
III 学会基金	¥4,352,469	①-②
収入		
2023年度までの積立金	¥4,652,469	
2024年度積立金	¥500,000	¥5,152,469 ①
支出		
HPシステム構築・改良費用	¥100,000	
資料保存・アーカイブ化 調査費	¥200,000	
倫理ガイドブック増刷	¥500,000	
学会賞	¥0	¥800,000 ②
IV ゼミナール・ワークショップ基金	¥1,594,513	①-②
収入		
2023年度までの積立金	¥1,594,513	
2024年度積立金	¥200,000	¥1,794,513 ①
支出		
ゼミナール・ワークショップ補助金	¥200,000	¥200,000 ②
V 国際交流基金	¥3,748,153	①-②
収入		
2023年度までの積立金	¥3,748,153	
2024年度積立金	¥200,000	¥3,948,153 ①
支出		
韓国音楽教育学会との交流事業	¥100,000	
国際交流促進事業費	¥100,000	¥200,000 ②
VI 選挙積立金	¥765,594	①-②
収入		
2023年度までの積立金	¥165,594	
2024年度積立金	¥600,000	¥765,594 ①
支出		
		¥0 ②

(6) 第55回大会について (権藤)

2024年度第55回大会について、玉川大学での開催が提案され、承認された。
会場校の野本由紀夫会員より10月19日(土)・20日(日)に開催予定であることが報告された。

(7) 第56回大会候補地について (権藤)

九州地区での開催が提案され、承認された。

(8) 次期役員について (権藤)

第26期会長・理事選挙において、次期会長と20名の理事が選出されたことが報告された。続いて、会則10条に則り次期役員が提案され、承認された。(敬称略)

会長：権藤敦子 副会長：有本真紀 事務局長：本多佐保美
常任理事：伊野義博 今川恭子 今田匡彦 小川容子 菅道子 菅裕 寺田貴雄
中嶋俊夫 水戸博道
理事：樫下達也 阪井恵 高見仁志 中地雅之 西島央 長谷川慎 松永洋介
三村真弓 山下薫子

編集担当(理事互選)：西島央 (常任理事互選)：今川恭子

国際交流担当(理事互選)：今田匡彦

広報担当(常任理事互選)：中嶋俊夫

会計監事：伊藤誠・杉江淑子

(9) その他

権藤会長より、現在進行中の事業について報告され、承認された。

- ・明日のプロジェクト研究では、資料の保存・アーカイブ化WGの成果も踏まえ、昨年度からの継続課題に取り組んだ発表が行われる。プロジェクト研究を萌芽として発展させた研究を広く会員に呼びかけて展開し、出版物として公開する方向でWG(座長：今川企画担当常任理事)を立ち上げる。今年度中に計画を策定し、2024年度補正予算に計上し次年度から本格的に始動したい。
- ・倫理ガイドブックの発刊から10年が経過したため、WGを立ち上げ改訂に取り組む予定である。
- ・様々な学会業務の電子化、ホームページの改訂も順次進めていく予定である。

5. 報告事項

(1) 会務報告 (齊藤)

2022年11月5日～2023年10月14日までの会務報告がなされた。

会務報告 <2022年11月5日～2023年10月14日>

2022年度	
11月5日、6日	第53回大会・総会(国立音楽大学/オンライン)
12月18日	ニュースレター第90号発行
12月31日	『音楽教育実践ジャーナル』vol.20発行
2月12日	2022年度第4回常任理事会(Web会議)
2月13日	2022年度第4回編集委員会(Web会議)
3月18日	ニュースレター第91号発行
3月31日	『音楽教育学』第52巻第2号発行
3月31日	2022年度会計決算
2023年度	
4月21日	2022年度会計監査会(Web会議)
4月22日	2023年度第1回常任理事・理事会(Web会議)
5月18日	ニュースレター第92号発行(オンライン)
5月21日	2023年度第1回編集委員会(対面)
5月31日	第54回大会研究発表・共同企画申込・要旨締切
6月23日	第54回大会研究発表受理通知
7月9日	2023年度第2回常任理事会(Web会議)
7月10日～28日	第26期会長・理事選挙(電子投票&郵送投票)
8月18日	ニュースレター第93号発行
8月20日	2023年度第2回編集委員会(対面&Web会議)
8月31日	『音楽教育学』第53巻第1号発行
8月31日	第54回大会プログラム発送
9月22日	第54回大会参加申込締め切り
9月26日	第54回大会参加費振込締め切り
10月13日	2023年度第3回常任理事会、第2回理事会(対面)
10月14日、15日	第54回大会・総会(弘前大学/対面)

(2) 選挙報告 (山本)

5名の選挙管理委員が協力して丁寧な打合せを重ね、事務局のサポートのもと、ミスなく電子投票を実施することができたことについて報告された。電子投票を行うことで、開票の正確さや開票の速度面で大きな改善がみられたこと、一方、郵送を希望されている方もいることから、全て電子化するかについては今後の判断になることなどについても説明された。

(3) 各委員会等から

・編集委員会 (今田)

第3回編集委員会が10月22日(対面開催, 聖心女子大学)に開催予定であり、研究論文4本(新規3本, 修正再査読1本), 研究報告2本(新規1本, 修正再査読1本), 論考2本(新規)について審議すること、『音楽教育実践ジャーナル』vol.21 通巻34号の入稿が終わり、12月末に発刊予定であること、審査の際、執筆者の匿名性を保つため、投稿規定及び執筆の手引きの改正を行ったことが報告された。

・国際交流委員会 (菅裕)

2月18日に日韓音楽教育交流会があり8名登壇、約80名の参加があったこと、英語版のホームページの編集作業を行い、海外からの問い合わせや入会希望への対応ができるように進めていることが報告された。

・広報委員会 (笹野)

NL93号の印刷ミスのお詫びと今後の対応、再発防止策について報告された。主な原因は、広報委員からは完全原稿を入稿したものの、業者による印刷の面付けにミスがあり、さらに印刷の際にその確認がなされていなかったことである。今後の対応として、NL95号にお詫びと脱落した1頁(常任理事会報告)を掲載すること、再発防止策として、印刷する前に広報に面付け段階の写真を送ってもらい確認することなどについて説明された。

・音楽文献目録委員会 (長野→齊藤)

「音楽文献目録オンライン」での公開に関わり、書誌情報の取り方や分類についての審議、サイトの広告募集、募金活動を行うとともに、文献選定及びRILM国際版への登録、「音楽文献目録オンライン」での公開が行われていること等が報告された。

・教科教育学コンソーシアム (伊藤)

『教科教育学コンソーシアムジャーナル』第2号投稿論文の査読が行われていること、各教科におけるメソドロジーの比較研究が進められていること、第4回のシンポジウムが2024年3月10日(日)に開催予定であることが報告された。

・資料の保存・アーカイブ化WG (杉江)

資料に基づいて、「資料の保存・アーカイブ化WG」の検討及び作業状況について報告された。主に質問紙資料調査の保存・アーカイブ化に際しての必要書類、個票データを今後二次利用のために保存・公開することの考え方、資料の活用方法(当面は、当学会主体の研究としてのみ活用)などについて説明された。

(4) 第11回(2023年度)ワークショップについて (石上)

12月2日(土)に実施予定の第11回ワークショップ(「義太夫節(人形浄瑠璃 文楽の音楽)に親しむ」)の内容や申込状況などについて報告された。現在、10名弱の余裕があるので、HPよりぜひ申し込んでいただきたい旨、付言された。

6. 議長解任

7. 閉会の辞 (有本)

.....

2. 2023 年度 日本音楽教育学会 第3回常任理事会

日 時：2023 年 10 月 13 日（金）15：00～16：00

※一部は、メール審議 2023 年 9 月 10 日（日）～9 月 20 日（水）に実施

場 所：弘前大学文京町キャンパス（弘前大学創立 50 周年記念会館 2 階 会議室 2）

出 席：権藤、有本、齊藤、今川、今田、菅道子、木村、笹野、嶋田、菅裕、杉江、寺田（記録）

第2回理事会と重複する審議事項・報告事項が多いことから、事項を絞って審議・報告が行われた。

【メール審議の報告】<2023 年 7 月 9 日以降>（齊藤）

理事メールおよび常任理事メールによって審議済みの事項について、資料に基づき報告があった。

【審議事項】

1. 第 55 回大会について 於：玉川大学（権藤）

第 55 回大会について、玉川大学で開催予定であることが報告され、承認された。大会運営上の課題について意見交換し、円滑な運営に向けて関東地区で検討するように依頼することになった。

2. 第 56 回大会候補地について 於：九州地区（権藤）

2025 年度九州地区での開催を依頼したいとの説明があり承認された。菅裕理事から、九州地区内で調整中であることが報告された。

3. 学会誌論文の電子掲載について（権藤）

EBSCO 社データベースには『音楽教育実践ジャーナル』の全文が掲載できるが、RILM には『音楽教育学』の掲載論文の要旨のみの掲載になっている。RILM に全文掲載できるようにしたいが、国際本部と交渉する必要があることから、その対応について編集委員会で検討するように依頼したとの説明があり、承認された。

【報告事項】

1. 会員のメーリングリスト作成について（権藤）

各地区所属会員のメーリングリストを作成する方向で検討していることが報告された。

2. 研究倫理ガイドブック改訂版発行に向けて（権藤）

WGを設置して進めることが報告された。WG 構成員の人は、会長に一任し、新しい課題に対応した項目を加える方向で検討中である。

3. プロジェクト研究の発展的組織の設置について（権藤・今川）

現在進行中のプロジェクト研究を発展させて将来の出版物刊行を目指すことについて、今年度は準備にむけたWGを設置して、来年度に本格的な研究推進組織を設置する。プロジェクト研究を萌芽的な研究と捉えて研究テーマを再設定し、学会全体で進める研究推進組織（構成員は公募）を設置して出版を目指したいとの説明があった。研究推進組織についての意見交換が行われた。WG 構成員の人は、会長に一任することになった。

4. 資料の保存・アーカイブ化WG（杉江）

アーカイブ化の作業が順調に進んでおり、今年度中に終了する見通しであることが報告された。W

Gは今年度末で解散し、今後の資料の公開・活用の方針については、常任理事会の課題として検討して行くことが確認された。

<次回会議の予定> 第4回常任理事会（引き継ぎ）2024年2月4日（日）9：30～（オンライン）

.....

3. 2023年度 日本音楽教育学会 第2回理事会

日 時：2023年10月13日（金）16：00～17：00

場 所：弘前大学文京町キャンパス（弘前大学創立50周年記念会館 2階 会議室2）

出 席：権藤、有本、齊藤、今川、今田、菅道子、木村、笹野、嶋田、菅裕、杉江、寺田、石井、石上、伊藤、小畑、國府、津田、山下（記録）

欠 席：新山王、三村

審議事項に先立ち、齊藤事務局長より、以下のとおり、会務報告が行われた。

【会務報告】<2023年7月9日以降>（齊藤）

7月9日	2023年度第2回常任理事会（Web会議）
7月10～28日	第26期会長・理事選挙（電子投票）
8月18日	ニュースレター第93号発行
8月20日	2023年度第2回編集委員会（対面&Web）
8月31日	『音楽教育学』第53巻第1号・第54回大会プログラム 発行・発送
9月22日	第54回大会参加申込締め切り（事前）
9月26日	第54回大会参加費振込締め切り（事前）
10月13日	2023年度第3回常任理事会、第2回理事会

【メール審議の報告】<2023年7月9日以降>（齊藤）

資料に基づき、齊藤事務局長より、以下のとおりメール審議の報告が行われた。

- ・7月19日（審議：石上）「第11回ワークショップの運営方法について」→同24日承認
- ・8月3日（報告：会長）「第26期会長・理事選挙について」
- ・8月21日（審議：事務局長）第3回常任理事会・第2回理事會事前メール審議
 - ①2023年度事業計画（齊藤）→9月16日承認
 - ②2023年度補正予算（寺田・國府）→9月16日承認
 - ③2024年度事業計画（齊藤）→9月16日承認
 - ④2024年度予算（寺田・國府）→9月21日承認
 - ⑤2023年度総会議案（齊藤）→9月23日承認
- ・9月18日（審議：今川）『音楽教育学』投稿規定等の一部改訂について→同20日承認
改訂内容は、次のとおりである、『音楽教育学』投稿規定、『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定、「執筆の手引き」、「チェックリスト」（テンプレート1ページ目）。

【審議事項】

1. 新入会員及び退会者について（齊藤）

2023年7月9日以降、正会員16名、学生会員1名の新入会があり、正会員2名の申出退会があったことが説明され、承認された。これにより、2023年10月10日現在、正会員は1,560名、学生会員

は4名，名誉会員は1名，特別会員は4名である。

◆正会員 新入会員（2023年7月9日常任理事会以降）

個人情報保護のため削除しました。

正会員新入会 16名

◆学生会員（2023年7月9日常任理事会以降）

個人情報保護のため削除しました。

学生会員新入会 1名

2. 第55回大会について 於：玉川大学（榎藤）

玉川大学を開催大学とすることが承認された。

3. 第56回大会候補地について 於：九州地区（榎藤）

九州地区を開催地区とすることが承認された。

4. 次期役員について（榎藤）

10月14日（土）13:00より開催される「役員選出のための理事会」にて次期役員の分掌を決定することが承認された。

5. その他（榎藤）

倫理ハンドブックの増刷が必要となり，発行後10年になるので改訂を行うこと，プロジェクト研究での取組を発展させ，学会としての研究・出版の計画を進めること，そのためのWGを発足させる旨，説明があった。また，資料の保存・アーカイブ化WGについては今年度末で締めくくり，成果

と課題を企画担当の理事が引き継ぐ予定であることが説明され、いずれも承認された。

【報告事項】

1. 第54回大会の最終確認事項など（今田）

弘前市観光コンベンション協会への手続きを経て、公益社団法人青森県観光国際交流機構より大規模イベントの開催助成として30万円の交付が決定し、収支決算が黒字になる見込みであるとの報告があった。

2. 第11回（2023年度）ワークショップに向けて（石井・石上）

7月20日に開始された申込が、現時点で42名であり、定員50名まで少し余裕がある旨、報告があった。

3. 各委員会等報告

(1) 編集委員会（今田）

第3回編集委員会が10月22日（対面開催、聖心女子大学）に開催予定であり、研究論文4本（新規3本、修正再査読1本）、研究報告2本（新規1本、修正再査読1本）、論考2本（新規）について審議すること、『音楽教育実践ジャーナル』vol.21 通巻34号の入稿が終わり、12月末に発刊予定であること、審査の際、執筆者の匿名性を保つため、投稿規定及び執筆の手引きの改正を行ったことが報告された。

(2) 国際交流委員会（菅裕）

海外からの入会希望に応えるため、英語版Webサイトの作成に向けて、サンプルが提出された。これに基づき、英語版は中・長期的に掲載できる内容に絞るという方針が承認され、このまま計画が進められることとなった。

(3) 広報委員会（笹野）

ニュースレター93号において、印刷所の面付けミスにより、ページの一部が欠損するという事故が生じた。その対応策として、印刷発行する95号に当該部分を挿入することとなった。また、再発防止策として、印刷所から事前にjpgファイルを送ってもらい、担当委員が確認するという工程を挟むことになった。

(4) 選挙管理委員会（山本→菅道子）

オンライン選挙が滞りなく完了したことについて報告があった。従来どおりの紙媒体による投票を希望した会員は4名であった。スケジュールの関係で、投票結果をニュースレター93号に掲載することができなかったため、8月末に別紙に印刷し郵送した。

オンライン投票では、被選挙人名簿の画面表示が見づらいなどの意見が出されたことから、次回に向けて改善を図ることとなった。

(5) 音楽文献目録委員会（長野→齊藤）

以下の4点について報告があった。

①昨年度の音楽教育学会総会以降、2023年2月、4月、6月にそれぞれオンライン、メール、ハイブリッドの形式で音楽文献目録委員会が開催された。

②「音楽文献目録オンライン」の独自性を高めるために、書誌情報の取り方や分類についての審議を継続的に行っている。

③「音楽文献目録オンライン」サイトへの広告募集、遡及入力のための募金を随時行っている。日本音楽教育学会からは2022年に4年分の寄付をいただいた。

④各委員は定期的に文献選定を行い、音楽文献目録委員会事務局を通して、RILM国際版への登録、「音楽文献目録オンライン」での公開が行われている。

(6) 教科教育学コンソーシアム (伊藤)

現在、編集委員会と研究推進委員会という2つの委員会が設置されていること、今年度は『教科教育学コンソーシアムジャーナル』第2号の編集作業が行われていること、2024年3月10日開催予定のシンポジウムは、教科教育学のメソドロジーの比較研究及び海外動向のレビューをテーマとすることが報告された。

(7) 資料の保存・アーカイブ化WG (杉江)

資料に基づき、主に以下の点について報告があった。

①過去の調査資料の保存・アーカイブ化について、「小・中学校の生活と音楽に関する調査」(1987年)、「音楽科の授業内容と児童の意識に関する調査」(2015年)、「学習者アンケート(Webアンケート)」(2015年)の質問紙調査3点の保存が、今年度中に完了する見込みである。

②質問紙調査資料の保存・アーカイブ化に際して、次の7点を必要書類一式とする、調査資料の概要(保存データ説明書。必須：公開)、調査対象・回収数一覧(個人名と学校名を削除。必須：公開)、調査対象・回収数一覧(個人名を削除。必須：非公開)、質問紙調査票(必須：公開)、入力データ(個票データ・マイクロデータ。必須：公開)、PDF化された全回収調査票(可能であれば：非公開)、調査実施時における調査報告等成果物(可能であれば：公開)。

③資料の公開・活用については、当面の間、本学会主体の研究としてのみ二次分析に活用することを可とし、今後の方針については、常任理事会・理事会で検討の上、必要ならば然るべきWGを新たに設置いただくとの考え方が示された。

4. その他

(1) 名簿作成について (菅道子)

12月発行予定の名簿については、項目を慎重に検討した結果、氏名、会員番号、所属、メールアドレスのみを掲載することとしているが、今後は、専門分野などの情報も併せて掲載できるよう、マイページを改変してはどうかという意見が出ているとの報告があった。

(2) 会議に伴う旅費について (齊藤)

発着地が都内の場合、一律1,000円の支給とされてきたが、今後1,000円を超える場合は実費とすることになった。

(3) 出版について (権藤)

審議事項5の研究・出版の計画の方針について報告があった。

.....

4. 第26期役員選出のための理事会

日時：2023年10月14日(土) 13:00~13:30

場所：弘前大学文京町キャンパス (弘前大学創立50周年記念会館 2階 会議室2)

出席者：有本、伊野、今川、今田、樫下、菅道子、権藤(記録)、阪井、寺田、中地、中嶋、松永、水戸、三村、山下

会則第14条の7の規定に基づき本会議を開催すること、委任状4通を含め、会議成立の定足数を満たす出席者がいることが確認された。

1. 次期副会長の指名

有本真紀会員が指名され、承認した。

2. 事務局長の選出

本多佐保美会員を選出した。

3. 常任理事の選出

伊野義博 今田匡彦 今川恭子 小川容子 菅 道子 菅 裕 寺田貴雄 中嶋俊夫 水戸博道の各会員を常任理事として選出した。

4. 会計監事の選出

伊藤誠会員、杉江淑子会員を推薦することが承認された。

5. 地区担当理事の選出

北海道：寺田貴雄 東 北：今田匡彦 関 東：中地雅之 北 陸：伊野義博
東 海：松永洋介 近 畿：高見仁志 中国四国：三村真弓 九 州：菅 裕
の各会員を地区担当理事として選出した（後日決定分も含む）。

6. 分掌について

理事互選、常任理事互選による委員も含め、下記の通り決定した。

総 務：伊野義博・水戸博道（常任）

企 画：小川容子・菅 裕（常任）・檜下達也・山下薫子（理事）

会 計：寺田貴雄（常任）・長谷川慎（理事）

編 集：今川恭子（常任）・西島 央（理事）

国際交流：今田匡彦（常任）

広 報：中嶋俊夫（常任）

事 務 局：菅 道子（常任）

7. 今後の予定

常任理事会における引継ぎ 2024年2月4日（日） 11：30～ オンライン（Zoom）

2024年度第1回常任理事会 2024年4月21日（日） 10：30～ 於 聖心女子大学（予定）

2024年度第1回理事会 2024年4月21日（日） 13：30～ 於 聖心女子大学（予定）

5 事務局より

事務局長 齊藤 忠彦

1. 年度会費納入のお願い

年度会費 (7,000 円) 未納の方は至急お支払いください。会費未納の場合、大会での発表、送付物の受け取り、論文投稿などに支障が発生します。2年間会費を滞納すると自然退会になります。会費納入後、約2週間で事務局より年会費振込の確認メールが自動送信されます。メールが届かない場合は事務局までご連絡ください。

2. 会員情報(所属先・住所など)の変更について

所属先・住所等に変更があった場合は、速やかに修正登録をお願いします。会員情報の変更は事務局では受け付けておりません。学会 HP「会員個人専用ページ(「マイページ」)」からご自身で変更していただきますようお願いいたします。メールアドレスが未登録の方は「マイページ」に入ることができませんので、事務局まで至急メールアドレスをご連絡ください。

3. 会員名簿の発行について

2023年12月末に「日本音楽教育学会会員名簿2023」を発行いたします。この名簿は、音楽教育の実践と研究の振興に資することを目的として、本学会会員の相互信頼にもとづき、その交流と親睦のために配付されるものです。名簿の取り扱いには細心の注意を払い、目的外に使用されることのないようご注意ください。

4. 学会誌のEBSCO オンラインデータベースでの公開について

現在J-STAGEにおいて学会誌の公開をしていますが、2024年度よりEBSCOのオンラインデータベースでも閲覧できるように準備をしています。この件に関して、既刊の執筆者のご意向、不明な点がある場合には、2024年1月22日(月)までに学会事務局宛ご連絡ください。

5. 年末年始の閉局期間のお知らせ

年末年始の閉局期間は12/28(木)～1/15(月)です。この間のお問い合わせはメール又はファックスをお願いします。お返事は1/16(火)以降になりますことをご了承ください。

..... 【編集後記】

第54回弘前大会が対面で開催されました。QRコードを読んで資料を閲覧するなど、コロナ禍で発展してきた新しい発表のかたちを目の当たりにしました。それとともに、対面だからこそ感じられる場の熱気や、視線を合わせ、気配を感じながらやりとりすることのあたたかさを感じた2日間でもありました。本号においても、そうした喜びの声が多く寄せられました。次号(95号)は紙媒体での発行予定です。引き続き皆様からの最新の情報やご意見をお待ちしております。(上野 智子)

.....

【日本音楽教育学会事務局】

所在地 : 〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206 Tel. & Fax. : 042-381-3562

E-mail : (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱 : 〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

郵便振替口座 : 00110-6-79672, 日本音楽教育学会

他金融機関からの振込 : ゆうちょ銀行, 〇一九(ゼロイチキョウ)店, 当座0079672, 日本音楽教育学会

開局日時 : 火・木 10:00～15:00

事務局員 : 宇田川・亀山・徳山・若尾